

平成29年8月27日7付毎日新聞(25面)「立野ダム問題 国交省、虚偽説明認める 現地見学会 質問状の回答拒否」との報道に関する国土交通省の見解について

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島 康

連絡先 熊本市西区島崎 4 丁目 5 - 13 電話 090 - 2505 - 3880

上記見出しの記事について 8 月 28 日、国土交通省立野ダム工事事務所はホームページに見解を掲載していますが、事実関係は下記の通りです。

1. 同記事抜粋

国土交通省は 26 日、(中略) 住民団体が見学会の場で文書回答するよう求めていた 35 項目の公開質問状に対する回答は再び拒んだが、7 月 29 日の前回見学会参加者が「虚偽説明」と指摘した工事用道路が 7 月 6 日の豪雨で流されていた事実は認めた。8 月 21 日に復旧したが、25 日夜から 26 日朝にかけての豪雨で再び工事用道路の下流側が浸水し使えなくなっているという。(中略) また、ダム底の放流孔に押し寄せた流木や土砂がダムの水位上昇とともに水面に浮上した事例は世界的にも一例も確認されておらず、「放流孔は詰まらない」との国の主張の根拠は丸太状の木だけを流した模型実験結果しかないことも明らかにした。(後略)

2. 国土交通省の見解

見学会においては、限られた時間の中での説明となることから、参加者の皆様のご関心が高いと思われる事項を中心に説明することとしており、8 月 26 日の第 2 回見学会においても、平成 28 年熊本地震による被災箇所への復旧状況も含め、説明させていただきました(当日の配付資料は別添)。

1) 質問状の回答について

立野ダムに関して頂くご質問等については、質問内容を整理したうえで、事務所 HP トップに「よくある質問」をもうけ、そこで回答をすることとしており、質問状を提出された市民団体の皆様にもこの旨説明をしているところです。

2) 左岸工事用道路(河床部)について

見学会では、熊本地震等により流出した左岸工事用道路(河床部)については、仮復旧が本年 3 月 27 日に完成した事実を説明しています。また、参加者からの質問に対し、当該工事用道路は恒久構造物とは異なり、出水等により損傷が生じることを想定したものであり、その都度補修しながら利用することとしているものであること、7 月 6 日の出水により損傷し 8 月 21 日に仮復旧工事が完了したこと、8 月 26 日の出水により損傷したこと、その都度復旧を行い利用するものであることを説明しており、虚偽の説明をしたとの認識はありません。

3) 放流孔について

見学会においては、放流孔について、立野ダムと同様の型式(流水型ダム)の既設ダムにおいて、放流孔内が土砂や流木により閉塞した事例は確認されていないこと、立野ダムについて模型実験により検証を行

っていること等説明しています。立野ダムの放流孔の構造については、土砂や流木がダムの洪水調節能力に影響を与えない構造とするよう、学識者・専門家の助言を受けるとともに、模型実験を含めた種々の調査・検討により構造を選定しています。

3. 事実関係

見学会においては、事前に公開質問状を提出していたにもかかわらず、公開質問状の質問項目には一切答えず、「ホームページを見るように」と繰り返すばかりでした。国交省は「参加者の皆様の関心が高いと思われる事項を中心に説明した」と述べていますが、質問状に記載した事項こそが、住民が最も関心がある事項です。

1) 質問状の回答について

国交省は「立野ダムに関して頂くご質問等については、質問内容を整理したうえで、事務所HPトップに『よくある質問』をもうけ、そこで回答をする」としていますが、ホームページに記載された内容を見ると住民の質問への回答となっていません。

また、国交省ホームページの『よくある質問』に記載された国交省の見解について質問しているにもかかわらず、長期間ホームページの更新もなされていません。

2) 左岸工事用道路（河床部）について

第1回目の見学会では、熊本地震等により流出した左岸工事用道路（河床部）の復旧も終わり、これから仮排水路の復旧に取り掛かるとの説明だったため、「7月上旬の増水で左岸工事用道路は流失したではないか。虚偽の説明をするな」と説明者を問い詰めたところ、説明した国交省担当者も虚偽の説明である点を確認しました。「虚偽の説明をしていない」等の発言は一切ありませんでした。

3) 放流孔について

国交省立野ダム工事事務所のホームページ『よくある質問』では、洪水時に放流孔を覆うスクリーンをふさぐ流木は「ダムの水位が上がると浮いてくる」としています。ところが、同ホームページに掲載された動画「立野ダムの洪水調節」では、「ダムの水位が上がると流木が浮いてくる」ようなシーンはなく、流木がスクリーンに流れ着くまでにダムの水位が上昇し、流木がスクリーンに到達しないことになっています。

洪水時にダムの水位が流木等捕捉施設の高さを超えたあとは、当然流木や枝や根、その他の浮遊物はスクリーンまで流れ、そこに貼りつくはずですが、そこで、「流木等捕捉施設からダム本体のスクリーンまでの200mの距離を、流木は何秒で到達する想定なのか。動画ではその間にダムの水位が約20m上昇することになっているが、ダムの水位は毎秒何mで上昇する想定なのか」等の質問を事前に提出しました。

また、7月の福岡県朝倉市周辺での豪雨では多くの土砂崩れが発生し、少なくとも36万m³の流木が支流の橋などに引っかかり、川をふさいで濁流があふれ、被害を拡大しました（日本経済新聞2017年7月14日参照）。ところが、立野ダムで計画されている流木捕捉施設は、約1万m³程度の流木にしか対処することができません。他にも、「放流孔がふさがる」点については多くの質問項目を提出してきましたのですが、それに対する誠意ある回答はホームページに一切記載されていません。

以上